

# GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT  
\*2025\*  
Summer

Voyage120 〈戦後80年特別プロジェクト〉

世界一周とともに  
TIME FOR PEACE



第二特集 一杯のビールから見えてくる世界



## TIME FOR PEACE

ピースボート地球一周の船旅 Voyage120報告  
〈戦後80年特別プロジェクト〉

# 世界一周とともに TIME FOR PEACE

Voyage120は、平和と出会いをテーマにした特別な旅。今回は戦後80年特別プロジェクトとして「TIME FOR PEACE(今こそ平和を)」が展開されました。ノーベル平和賞洋上特別展をはじめ被爆者や平和活動家たちの声が地球をめぐる、寄港地では対話や証言会も行われ、旅人として、そして地球市民として未来を考える時間となりました。一方で、美しい景色に出会い、異文化にふれ、心が自由に広がる世界一周の魅力もたっぷり。平和を想う時間と、人生を豊かにする旅が、ひとつの航海に融合しています。

PEACE BOAT Voyage120 Cruise Report

GLOBAL VOYAGE  
2025 Summer

CONTENTS

### 特集

ピースボート地球一周の船旅 Voyage120報告  
〈戦後80年特別プロジェクト〉

世界一周とともに  
TIME FOR PEACE…………… P3

「TIME FOR PEACE」  
平和をつくる意味を考える機会に…………… P4

洋上で、寄港地で、平和を訴え、  
語りあうプログラムを展開…………… P6

今、伝えたい記憶と願い  
ノーベル平和賞洋上特別展…………… P8

Voyage120  
参加者が心奪われた寄港地…………… P10

### 第二特集

一杯のビールから  
見えてくる世界…………… P14

日本一周クルーズ 2026夏  
日本三景  
3つの海をめぐる船旅…………… P16

きらめきと笑顔が交差する  
マスカレードパーティー…………… P18





## 「TIME FOR PEACE」 平和をつくる意味を考える機会に

戦後80年を迎える2025年、ピースボートは「TIME FOR PEACE」と題した特別プロジェクトを行っています。これは「過去の戦争を見つめ、未来の平和をつくる」というピースボートの創設理念を掲げ直し、今も戦禍にいる人たちに目を向けながら、平和を改めて希求していく取り組みです。戦争が止むことのない世界の現状だからこそ、平和のメッセージを発信しともに考える。プロジェクトの内容などについて共同代表の畠山澄子に聞きました。



ピースボート共同代表・  
国際部コーディネーター

**畠山 澄子** HATAKEYAMA Sumiko

TBS「サンデーモーニング」コメンテーター。ケンブリッジ大学卒、ペンシルベニア大学大学院卒(博士・科学技術史)。おりづるプロジェクトや「地球大学」などを中心に、「顔の見える国際交流」を主軸に据えた船旅のコーディネートに携わる。

戦後80年の節目にピースボートは「TIME FOR PEACE」を通してどのようなことを発信していくのでしょうか。

日本の視点からいうと戦後80年は大きな節目であり、戦争体験者や被爆者の方々から「生の声」を聞ける時間が多くは残っていない危機感があります。彼らとともにさまざまな平和活動に取り組んできたピースボートとしては、国内のこうした機運を掴み平和へのメッセージを発信していきたい。一方世界の視点からいうと現在ウクライナ、ガザが戦禍に包まれ、アフリカや中東の紛争もあります。私たちはこの80年間に起きた戦争と

今起きている戦争に目を向け、日本の加害も含めて、ピースボートが創設当初から掲げている理念「過去の戦争を見つめ、未来の平和をつくる」という意味を Voyage 120 から122まで3クルーズを通して、改めて考える機会にしたいです。

今回「TIME FOR PEACE」というテーマが設けられましたが、これはピースボートがこれまで平和活動を継続してきた、その延長線上にあるものですね。



そうですね、まずピースボートの船旅そのものが平和活動だということです。顔の見える国際交流は時間がかかるかも知れませんが、お互い少しずつ理解し合い平和をつくっていくというのが根本にあります。乗船される方はそこまで強く意識されていないかも知れませんが、色々な



国を訪れてその国の人々との出会いふれあうことが平和活動なんですね。そのほかに戦争体験者の声を伝える活動にも取り組んできましたが、その一つが2008年に始まった「ヒバクシャ地球一周証言の航海」で、広島、長崎の被爆者の方を招待して世界各地で被爆証言を行ってきました。また旧ユーゴスラビアの戦争を体験した若者に乗船してもらったり、イスラエル、パレスチナ双方の若者を船に招いて対話の場を提供したり、単にどちらが勝ったとか優勢だといったことではなく、ピースボートが行ってきたのは、人間にとつての戦争がどういうものかを伝えることだと思えます。さらに言うところ、カンボジアの地雷廃絶キャンペーン、世界各地へ支援物資を届けるプロジェクトなど、小さな力かも知れませんが自分たちが行動することのできるものがある、というのを提示していく取り組みも継続してきました。

「TIME FOR PEACE」ではどのようなプログラムが用意されているのですか。

いくつか柱になるプログラムがあり、その一つが「ノーベル平和賞洋上特別展」です。この企画の立ち上げとともに、オスロのノーベル平和センターと公式の提携協定を結ぶことができ、それによつて実現した展示会です。被爆時の写真や被爆者の肖像などを展示し、各寄港地で現地の学生や市民団体の方などを招待して、核のない世界を訴えていきます。Voyage 120では、「ヒバクシャ地球一周証言の航海」

今回の特別プロジェクトへどのようなことを期待していますか。

戦後80年とは言いつつも日本では軍事費が増大し、核抑止を肯定するような声も以前よりは大きくなっている実感があります。ですからピースボートクルーズに乗船された方々が、「やっぱりTIME FOR PEACE今こそ平和だよ」と実感し、その想いを広げてもらいたい。クルーズを通してこれからも平和のために考える「場」を提供していきたいと思っています。





# 洋上で、寄港地で、平和を訴え、語りあうプログラムを展開

Voyage120はそのクルーズ期間中、多彩なプログラムが展開されました。「TIME FOR PEACE」というテーマのもとピースボートのグローバルなネットワークを活かして、いつも以上に世界の人々と、戦争と平和、核なき世界について語りあい、未来への希望を見出していきます。洋上や各寄港地で行われたプログラムの一部を紹介します。



今回のクルーズで二周を通して実施されている「ノーベル平和賞洋上特別展」と「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」以外のプログラムで、アジア区間での大きなプログラムは東北アジア平和構築インスティテュート（NARPI）とのセッションでした。中心メンバー約20名が深圳からシンガポールまで乗船。区間中、平和構築の実践について講演会のほかワークショップが開かれ、対立を乗り越えるために何が必要か熱く意見が交わされました。シンガポールの港ではインターナショナルスクールの高校生が訪船し、展示会や証言会に耳を傾けました。ベトナムではベトナム戦争の枯れ葉剤の被害者の方が乗船し、話を聞いたことも貴重な体験になりました。

ヨーロッパ区間では、「戦時性暴力被害者ネットワーク SEMAウクライナ」のメンバーやイランイラク戦争で化学兵器のサバイバーの方が乗船。戦争被害を語る辛さ以上に、自らの体験を通して戦争の愚かさや平和の尊さを訴える言葉は、聞き入る人たちの胸の奥深くに届きました。また武力紛争予防のためのグローバル

パートナーシップ（GPAC）の専門家から、紛争予防のためにコミュニティ内の紛争の種を摘んでいくアプローチなどを聞いたことも今回のプロジェクトならではの機会でした。

このほか水先案内人による講演や対談なども多く実施され、船内では新たに「TIME FOR PEACE コミュニケーター」というプロジェクトが開始しました。これは自分たちが聞いた貴重な話を、他の人にも伝え平和の輪を広げていこう、ということです。平和活動に具体的にどう取り組んでいくべきか、今ひとつ見えにくかった人たちにとって、「知る」ことから始まり、「伝える」ことの必要性に気づき、そして「行動する」という道標ができたことは大きな収穫



SEMAウクライナのリーダー、イリーナさんが活動を紹介。



世代を超えて議論が交わされる「しゃべり場」。



船内で成果発表の一環として行われた「洋上国際会議」。

です。船内にはテーマを決めて乗船者が話し合う「しゃべり場」という企画がありますが、ここでも世代を超

えて自分たちが聞いた話を伝えていくためにどうすべきか、活発な意見が交わされました。

ヨーロッパ区間ではベルゲンからレイキャビク間でICANのメリッサ・

パーク事務局長はじめ国際事務局のスタッフが乗船し、国際スタッフ会議が開催され2026年の核兵器禁止条約第1回再検討会議への活動方針が話し合わせられ、被爆者の方や乗船者との交流も実現しました。

アメリカ区間ではニューヨークで国連軍縮部とともに公式に船内イベン

トを開催。国連事務次長であり軍縮担当の中満泉さんをはじめ各国の政府代表団を招いて「平和と軍縮」をテーマに未来へ向けて有意義な話し合いがもたれました。

Voyage120は特にこのようなプログラムが多く展開されましたが、もちろん、すべては自由参加です。よって船旅をのんびりと過ごされる方もいらっしゃいますが、Voyage121、122に乗船予定の方は関心あるプログラムがあればぜひご参加ください。



ICANメンバーを迎えるイベントに備えるシアター会議。



元朝日新聞編集委員、ジャーナリストである水先案内人、加藤千洋さんの講演。



ニューヨークでは国連事務次長、中満泉さんを迎えてイベントを開催。



# 今、伝えたい記憶と願い ノーベル平和賞洋上特別展

「TIME FOR PEACE」のハイライトともいえる「ノーベル平和賞洋上特別展」。戦後80年を迎えている今、伝えるべき記憶と、これから生きる世代に向けた願いがこの展示には詰まっています。展示は洋上で世界をめぐり、寄港地でゲストや市民と共有することで対話と共感の輪が静かに、しかし確かに広がっています。



## 洋上特別展と ゲストを迎えての交流

船内のノーベル平和賞洋上特別展では、被爆直後の写真や被爆者の肖像などが展示されています。クルーズ期間中、各寄港地では現地の市民団体、学生など多くの方を招待。見る者の胸に迫ってくる展示物の数々は、一つひとつが反戦そして核廃絶への力に満ち、展示物の前で人々が足を止めて食い入るように見入る姿が印象的でした。

ポートリスではモリシヤス大学の学生たちや環境保護団体のインターンの皆さんが訪船。展示会への案内とともに証言会も合わせて開催



## オープニングセレモニーから 平和の船旅が起航

Voyage 120の出航に先立ち、4月22日、パシフィック・ワールド号内にて「ノーベル平和賞洋上特別展」のオープニングセレモニーが開催されました。来日したノーベル平和センターのキム・レクステン・グルンネベルグ氏（広報ディレクター）や学芸員が登壇し、「この展示は戦争と核の悲惨さを超えて、平和の文化を築く大切な一歩」と語りました。また日本被団協から和田征子事務局次長、神奈川県原爆被災者の会副会長・福島富子さんらも参加しました。

翌日4月23日、1700名の参加者は大勢の見送りの人々に囲まれるなか、横浜港を出航。「TIME FOR PEACE（今こそ平和を）」をテーマに旅が始まりました。船内にはノーベル平和賞受賞団体・日本被団協及びICAN（国際キャンペーン）の代表者や、被爆者として広島・伊藤正雄さんと長崎・倉守照美さんが乗船。ノーベル平和センターの洋上での初めての企画展とともに各地で証言会が開催されました。

され、参加者からは「被爆者の証言を初めて直接聞くことができてとても感動した」「政治的目線ではなく人としての目線で核兵器について考える貴重な時間だった」という感想を聞きました。

ジャマイカでは水先案内人として乗船された駐日ジャマイカ大使シヨナーケイ・Mリチャーズさんのネットワークでモンテゴベイ市長や女性活動家、大学生たちが訪船。展示会を熱心に見学していました。

パナマでは政府関係者約20人が訪船。「核なき世界のために何ができるか」という質問に対しピースボート共同代表の川崎哲は「政府関係者にも被爆者の声を届け被害の実相を伝えるとともに、核兵器を持たないほうが、持つよりもメリットがあることを訴えている」とピースボートの取り組みを紹介しました。

このほかシンガポール、ベトナム、南アフリカ、フランスなどでもこうしたゲスト訪船による展示見学、交流会が行われ、展示会という枠を超え「対話と共感の旅へと深化していきました。



## 被爆証言を行った 倉守照美さんの想い



「ナガサキを最後の被爆地にしたい。その願いを、私は世界に届けたかった」。倉守さんは、1歳で長崎で被爆し、今なお後遺症と向き合いながら活動が続けています。Voyage 120では、被爆の実相と平和への願いを洋上展示と証言を通じて発

信。各地の寄港地では若者たちとの対話の機会も多く、「話すたびに聞く側の反応が変わっていく。その手応えが力になる」と話します。限られた時間の中で記憶の橋渡し役を担う彼女の言葉には、未来を変える力が宿っていました。







北へ南へ、東へ西へ。Voyage120のクルーズは、地球を丸ごと体感しました。アフリカの陽光がまぶしいケープタウン、古きと新しきが共存するヨーロッパの街並み。氷河が語るアラスカの静寂、どの寄港地も、その土地ならではの空気をまとい、五感を刺激してくれました。ここでは、航海の中でも特に参加者の満足度が高かった寄港地をピックアップし、リアルな体験とともに紹介します。

## Voyage120 参加者が心奪われた寄港地

大歓迎を受けた深圳の港。



### 摩天楼を背に

### 自由の街を存分に楽しむ「ニューヨーク」

夜明け前、デッキに集う参加者たちの視線の先には、刻々と姿を変える「ニューヨーク」の摩天楼。ブルックリン橋、セントラルパーク、タイムズスクエアと映画で見た風景がまもなく現実のものとなる期待に胸が高鳴りました。

多くの参加者が訪れたのがブルックリン橋。橋の上から見下ろす川の流れと、対岸に広がるマンハッタンの街並みに感動の声が上がりました。セントラルパークでは、朝のランニングやカフェでのモーニングを楽しむ地元の人々に混じり、旅先ならではのニューヨークの朝に浸るひとときも得られたようです。またブロードウェイの劇場へ足を運んだ参加者からは、「人生初のミュージカル」という感動の声も。ショーのクライマックスを一流の演者たちと共有する幸福なひとときを堪能しました。そして欠かせなかったのが、人気のハンバーガー。地元の店ならではの肉汁とパンズのバランスに「これぞアメリカの味!」と思わず笑みがこぼれる場面もありました。さらに船内では「TIME FOR PEACE」の一環としてピースコンサートが開かれ、

広島の現場を生き抜いた被爆バイオリンの演奏も披露され、平和への思いも感じられる寄港となりました。



本場ミュージカルの迫力ある雰囲気と演出に感動。



1:マンハッタンとブルックリンを結ぶアメリカ最古の吊橋のひとつブルックリン橋。2:世界の流行の最先端を体感できるタイムズスクエアに人があふれている。3:ボリュームたっぷりの本場バーガーを満喫。4:摩天楼のビル群がそびえるニューヨークに到着。5:ピースコンサートでは被爆バイオリンもその音色を響かせた。

### 南アフリカ屈指の観光都市を巡る

### 「ケープタウン」「ポートエリザベス」

「世界で最も美しい都市」のひとつとして人気の高いケープタウンはダイナミックな自然と歴史の薫り漂う街並みが魅力です。また「南アフリカのフレンドシティ」として知られるポートエリザベスは雄大なサファリから歴史や文化にふれることのできる観光地です。

南アフリカ東部、陽光あふれるポートエリザベスに寄港。参加者に人気があつたのは、アドベンチャー感満載のサファリ体験。野生のキリンやシマウマと出会うたび、車内から大きな歓声が上がりました。市内では、眺望の良い「ドンキン保護区」で開放感に浸り、歴史的建造物やアートの点在するエリアを散策。南アフリカらしさを肌で感じる1日となりました。続いての寄港地ケープタウンでは、頂上が切り取られたような偉容を誇る「テーブルマウンテン」が迎えてくれました。植物好きの参加者は「カーステンボッシュ国立植物園」で固有種の花々に心を奪われ、ウォーターフロントでは活気ある洗練された雰囲気の中、ショッピングを楽しみました。旅のハイライトである大西洋を望む「喜望峰」では、「地球の果てに來たよう」と声がこぼれるほどの絶景が広がっていました。



6:幾多の船乗りを導き続けた「喜望峰」は街の中心から約50キロの場所にある。7:象やキリン、シマウマ、サイなどに会えるサファリ体験。8:自然と都市が融合した魅力に富んだケープタウンの全景。



### 彩りの街と絶景の島へ

### 初寄港「テネリフェ島」

大西洋に浮かぶカナリア諸島最大のテネリフェ島に、初寄港。快晴の空のもと、歴史の街ラ・グーナのトラムやカラフルな建物、活気あるアフリカマーケットを散策。地元名産のワインやコーヒーも堪能し、参加者たちにとって大満足の滞在となりました。



9:新鮮な焼きイカにサラダを添えたスペイン料理。10:大西洋に浮かぶ楽園、遥かにティデ山を望み海岸線が広がるテネリフェ島。



初寄港

大西洋の潮風を受けて訪れたテネリフェ島は、ピースボート初寄港でした。多くの参加者はまず真っ青な空に映える世界遺産「サン・クリストバル・デ・ラ・グーナ」の街区を訪れました。カラフルな家々と歴史ある教会群が並ぶ風景が旅情を誘います。街中を走るトラムに乗って散策する参加者も多く、潮の香りとともに明るい街の空気に包まれました。通り沿いに設けられたアフリカマーケットでは、見たことのない果物や地元の工芸品が並び、参加者はお土産探しに夢中。特に名産のワインは現地レストランで試飲され、笑顔が広がる光景が印象的でした。コーヒーも香り高く、マーケット内のカフェでは一息つきながら、通りの風景を眺める姿も見られました。初寄港という記念すべき訪問でしたがテネリフェの魅力を感じ、に感じられる寄港となりました。



## 水辺に寄り添う街々と氷河が刻んだ絶景

### 「ハンブルク」「ベルゲン」「ソグネフィヨルド」

クルーズの中盤で訪れたのは、歴史ある港町と静けさに包まれた大自然の風景でした。ハンブルクでは運河とレンガ倉庫街が迎え、ベルゲンでは中世の木造建築と北欧のぬくもりに触れました。そしてフィヨルド遊覧では、氷河が刻んだ峡湾の絶景が、旅の記憶に鮮やかに刻まれました。



ドローン撮影なども行われ温かく迎えられたハンブルク入港。



1:休憩するのに最適なスポットは運河に浮かぶお茶の専門店。2:もっちりとした食感がくせになるプレッツェル。



運河沿いにある赤レンガの倉庫街は世界遺産の「シュバイヒャーシュタット」。

ハンブルクの入港は、まさに感動ものでした。現地港湾局がバシフィック・ワールド号をドローン撮影し、歓迎メッセードとともにその映像をSNSにアップ。久しぶりの寄港でしたがピースボートへの理解と共感が伝わってきました。参加者たちはまず世界最大級の倉庫街「シュバイヒャーシュタット」へ。赤レンガ造りの重厚な建築が、商都としての歴史を今に語りかけてきます。街歩きでは、プレッツェルやライ麦パンを頬張りながら、

ハンザ同盟の面影が残る旧市街を散策。本場ドイツのビールに舌鼓を打ち、陽気な地元の人々との交流も楽しめました。戦後80年という節目の航海に選ばれたことを「誇りに思う」と語った現地関係者の言葉が象徴するように、この寄港は歓迎ぶりとともに参加者の心に深く刻まれました。北欧の夏、青空と静かな海を眺めながらベルゲンの港に着岸しました。可愛らしい三角屋根の建物が連なる風景が、参加者たちの気持ちを和ませます。赤や黄色、青の木造倉庫が軒を連ねる世界遺産「ブリッゲン地区」は中世にタイムスリップしたような風景が広がり、カメラ片手に散策する人々の姿が多くみられました。



いつまでも眺めていられる絶景が続く。

は「まるで絵本のような景色だ」という声もあり、参加者は北欧の神話を想像しながら、自然美に魅了されました。

## ハバード氷河の轟音と

### 原始の地球の姿「アラスカ遊覧」

北米最大級の氷河遊覧を楽しめるこの航路では、ハバード氷河が主役。地球の鼓動を感じる「サンダー」の轟音、クジラやイルカとの遭遇。参加者は純白の氷壁を背に、地球の歴史と自然が交差するアラスカの光景に心奪われました。

氷の海峡を進むバシフィック・ワールド号。参加者の視界に広がるのは、降雪を帯びてそそり立つハバード氷河です。海面から突き出す巨大な氷壁は、真っ白な光を反射し、大きな氷の塊が崩れ落ち「サンダー」と呼ばれる轟音が海峡に響くと、参加者たちは息を呑んで音の余韻を共有しました。そして遊覧中にはクジラやイルカも姿をみせました。フィヨルドそのものにも注目です。険しい雪山と深い緑、滝が音を立てて流れ落ちる山の斜面が、水面に鏡のように映り込み、幻想的な風景をつくり出していました。参加者たちはカメラを構えつつ、「自然のギャラリイのよう」とつぶやきながらこの非日常を噛みしめていました。クルーズならではのアプローチで巡るアラスカ遊覧は、地球の歴史と息吹を間近に感じる特別な体験となりました。



3:デッキからは多くの野生動物を見ることができ。4:壮大なハバード氷河のなかにあつてはバシフィック・ワールド号も小さく見える。5:ハバード氷河の400メートル付近を航行するとその圧倒的な姿が迫ってくる。

#### 乗船者の声

アラスカとノルウェーの  
フロム鉄道が二人にとって  
最高の思い出になりました。

小島俊治さん 信子さん  
(神奈川県在住)



俊治さん 寄港地はすべて良い思い出がありますが特にノルウェーで乗った「フロム鉄道」が素晴らしかったです。雄大な景色が広がり圧倒されましたね。

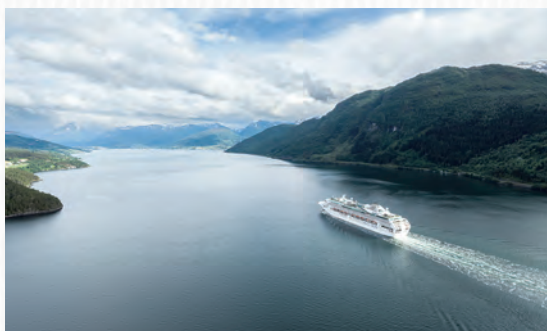
信子さん 車窓からの景色が美しく、絵本のよつな家があると思えばフィヨルドが見えたりしてどこか違う世界に来たようでした。



俊治さん アラスカも天気に恵まれてハバード氷河が最高でした。スワードでは友人たちとホエールウォッチングに出かけ、シャチャクジラを見ることができて太満足でした。信子さん スワードは素朴で素敵な町で、私はとても気に入りました。俊治さん 船内では趣味のサックスの練習に打ち込み、久しぶりに社交ダンスを楽しめたことも良かったです。信子さん 私も一緒に社交ダンスに挑戦し二人でワルツの発表会に出られたことが良い思い出です。俊治さん 今回航路変更がありましたが、まさに世界一周4大陸、地球の縦横を航行でき3ヶ月で四季を2回味わえ、とても素晴らしいクルーズでした。



伝統技法で建てられた木造家屋が並ぶ「ブリッゲン地区」。



ノルウェー最長の「ソグネフィヨルド」を悠々と往く。





## 温暖・湿潤地帯

(高緯度地域:スウェーデン、イギリスなど)



### 〔エールビール〕

温暖で湿潤な地域では、エール系ビールの個性が光ります。常温発酵が可能で、冷却設備が未発達だった時代にも安定して醸造できた点が大きな利点でした。また湿度が高く、温度変化の少ない環境は瓶内熟成にも好都合。副原料としてハーブ、果物、小麦、オート麦などを使うことも多く、フルーティさとスパイシーな余韻をもつ複雑な味わいが特徴です。雨が多く家でゆっくり味わう風習も、濃厚なスタイルを好む背景にあります。



## 冬でも心和むリアルエールの温かさ

英国ではパブ文化とともに育まれた「リアルエール」が根強く愛されています。自然発酵の生エールは手作業で樽から注がれ、キャッシュポンピングの技術が味を決める芸術品。麦の甘み、渋み、熟成による深みが穏やかに広がります。パブでは人々が顔を見合わせ「1パイント」を傾けながら語り合います。

### ロンドンプライド [イギリス]

モルトの旨みとやわらかな苦味が絶妙な英国の誇り。老舗フラズが生んだパブ文化を体現する名品です。



## 古代農家の薫り残す北欧のエール

スウェーデンでは、家庭醸造の伝統が北欧醸造文化の源。近年は地元産麦芽・ホップ・酵母を活用した手作りエールを生み出し、マイクロブルワリー文化が花開いています。古代には祝祭用の強いエール「サービ」も存在し、現代のクラフトビールと田舎の郷愁を結びつけるきっかけとなっています。

### カーネギーポーター [スウェーデン]

重厚な味わいとまろやかな口当たりが魅力。食後にじっくり楽しみたい、スウェーデン最古の伝統銘柄です。



## 黒ビールが紡ぐ、国民の誇りと歴史

アイルランドでは、ギネスが単なるビール以上の存在。1759年創業の聖地で生まれたドライスタウトは、ローストバーレイの深い香りと独特のクリーミーな泡が特徴。夕暮れのパブでは、友や地元の語り手とともに一杯を分かちあって乾杯します。文化と社交がビールの泡とともに混ざり合います。

### ギネス [アイルランド]

アイルランドを象徴する黒ビールの名作。独自の窒素注入によるクリーミーな泡。文化と歴史を感じる一杯です。



# 一杯のビールから 見えてくる世界

気候、文化、歴史、それぞれの国に根ざしたビールには、その土地らしい味と物語があります。ドイツの厳格な醸造法、イギリスの奥深いエール文化、熱帯アジアの爽やかな喉ごし。泡の向こうに、国民性や風土が垣間見えてきます。ビールは、旅の空気ごと味わえる「地元の一品」。世界のビールを通して、少し旅をしてみませんか。



## 太陽とともに飲む、陽気なラガー文化

高温多湿なメキシコには、喉越し爽やかなライトラガーが根付きます。グラスにライムを飾り、サルサやタコスとともに味わう一杯は、屋下がりのリフレッシュメント。カスタムグラスタイプやミチェラダなどピカカテルもポピュラー。軽く軽快な飲み口です。

### コロナ [メキシコ]

世界で愛されるメキシコの代表ラガー。ライムを添えて飲むことでメキシカンビーチ感が楽しめます。



## 熱帯・亜熱帯地域

(低緯度地域:メキシコ、東南アジアなど)



### 〔ラガービール〕

高温多湿な熱帯・亜熱帯地域では、喉越しが良く爽快感のあるラガービールが主流。麦芽に加え米やトウモロコシを副原料とし、軽やかでドライな味わいに仕上がっています。「とにかく冷やしてゴクゴク飲む」ことが重要視され、ビールは清涼飲料的な存在として根付きました。料理との相性も抜群で、スパイシーな東南アジア料理やメキシコの辛味の効いたタコスとも好相性。気候と食文化に寄り添うスタイルとして発展してきました。



## 「乾杯」は文化、人生の一部

ドイツのビール文化は日常に深く根ざしています。ビアガーデンで家族や友人と語り、乾杯する時間は「人生を祝う」ひととき。6月のビール祭りや、9月のオクトーバーフェストでは、民族衣装を身にまとい、陽気にジョッキを掲げます。飲み方も味わい方も、ドイツ人の几帳面さと陽気さが同居する独自の文化です。

### レーベンブローイ [ドイツ]

黄金色の液体にきめ細やかな泡、芳醇な麦芽の香りと、軽やかなホップの苦味が心地よく調和した、まさに王道ラガー。



## 静かに、そして深く味わう文化

チェコはビール消費量の多さで知られますが、ビール文化は派手さよりも質を重視。グラスの傾け方、泡の立て方にもこだわりが光ります。語りすぎず、飲みすぎず、じっくりと味わうのがチェコ流。老舗のパブでピルスナー・ウルケルを片手に過ごす時間は、まるで古きよきヨーロッパに帰ったような体験です。

### ピルスナー・ウルケル [チェコ]

世界で最初に造られたピルスナースタイルの元祖。ほんのり甘い麦芽に続き、爽やかなホップの苦みが引き締めます。



## 一杯が芸術、修道院が生んだ味も

ベルギーでは1,000種類以上のビールが造られ、修道院ビールや果実入りエールなど、個性豊かな味が揃います。専用グラスで提供されるのが基本で、泡の立ち方、香り、熟成の風味すべてに芸術的な配慮がなされます。ビールを通して、ベルギー人の繊細さと審美眼が垣間見えます。

### ステラアルトワ [ベルギー]

ホワイトフローラルの香りと軽い麦芽の甘みが鼻をくすぐり、後味に感じるレモンビールの爽やかさが印象的です。



## 寒冷・乾燥地帯

(中緯度地域:ドイツ、チェコなど)



### 〔ピルスナー(ラガー)ビール〕

寒冷地では低温で長期間熟成するラガービールが主流。洞窟や地下で低温発酵・貯蔵できる気候が、ラガー醸造を後押ししました。透き通った色とすっきりした苦味、麦芽のコクを併せ持つのが特徴です。また乾燥した気候はホップの栽培にも最適。チェコ・ザーツやドイツ・ハラウなど世界有数のホップ産地が生まれ、繊細で上品な香りがビールに彩りを加えます。厳しい冬に耐えるため食事との相性も重視され、しっかりとした味わいが愛されています。



## 暑さを忘れる、一杯の涼と風景

熱帯のタイでは冷たいラガーが日常に溶け込んでいます。代表ブランド「シンハー」は、暑さの中で軽快に飲める定番。夜の屋台街では、ビールと串焼きやスパイシーな料理が自然にペアリングされ、食べながら飲む時間が文化そのものです。ビールと食と社交が一体となって暮らしに根付いています。

### シンハー [タイ]

タイNo.1ビール。タイ人のライフスタイルに欠かせない、底醗酵のライトラガーで、食事と合わせやすい味わいです。



## アロハ精神とともに味わう地元ラガー

ハワイではクラフトビールが自然と暮らしに寄り添っています。アロハビール社の「アロハラガー」は、地元産素材で醸造され、軽やかで爽快感の味わい。サーフィン後やマリンスポーツの後に海辺のビアガーデンでくつろぐのが定番。ビールを通じて、ハワイの自然とリラックスした文化を感じられます。

### アロハラガー [ハワイ]

ホノルル生まれのクラフトラガー。ストロー色の爽やかなボディと軽やかな苦味。ハワイの陽気な空気を感じさせます。







人気の韓国・台湾など  
全11の寄港地をめぐる



宮島



基隆



那覇



長崎



釜山



舞鶴



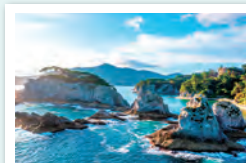
金沢



小樽



函館



宮古



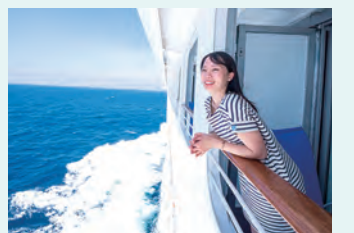
石巻

日本一周クルーズ 2026 夏

# 日本三景 3つの海をめぐる船旅



世界一周の船旅にお申し込みの皆様へ。来たる夏、洋上から日本の魅力を再発見する日本一周クルーズはいかがでしょう。短期間の船旅は、本番の世界一周への期待を一層高めるまたとない機会となるでしょう。ご家族様との思い出作りにも最適です。洋上で巡る新たな感動をぜひご体験ください。



2026年7月26日(日)～8月15日(土) [横浜発着21日間]



## 太平洋 松島

世界最大の海・太平洋の魅力は、なんといっても果てしなく続く水平線の雄大さ。松島は、大小260あまりの島々が点在する多島美と、そんな太平洋の水平線を同時に望める、まさに海の景勝が凝縮された唯一無二の場所です。



## 日本海 天橋立

荒波や吹雪など、厳しい自然のイメージが強い日本海。大地にミネラルを蓄え、豊かな海の幸と滋味深い作物を育みます。天橋立は、そんな自然の恵みを生み出す景観と歴史を残す、日本海を代表する名勝です。



## 瀬戸内海 宮島

瀬戸内海は穏やかな海として知られますが、潮流が速く、古くから航海の難所でもありました。宮島はその要所に浮かぶ「神の島」。静かな風の裏に潜む自然の力と信仰が結びついた景観は、瀬戸内海の歴史を物語っています。

日本一周クルーズ 2026年夏 2026.7.26(日)～2026.8.15(土) [横浜発着21日間]

お得な早得割引を実施中!

ベアバルコニーⅡ (2人部屋)

旅行代金98万円 ▶▶▶▶ **早得割引 62万円** (36万円引き)

スタンダードインサイドⅠ (2人部屋)

旅行代金69万円 ▶▶▶▶ **早得割引 46万円** (23万円引き)

●大人お一人様の料金です。●別途諸費用(チップ、ポートチャージ、国際観光旅客税)は含みません。●早得割引が適用されるのは、【2025年10月30日(木)午後2時まで】に早得割引後代金の全額をご入金頂いた場合に限りです。

旅行企画・実施 株式会社ジャパングレイス  
観光庁長官登録旅行業第617号 一般社団法人日本旅行業協会正会員 旅行業公正取引協議会会員

[寄港地] 横浜 ▶ 広島 ▶ 基隆(台湾) ▶ 那覇 ▶ 長崎 ▶ 釜山(韓国) ▶ 舞鶴 ▶ 金沢 ▶ 小樽 ▶ 函館 ▶ 宮古 ▶ 石巻 ▶ 横浜

●最少催行人員:1,000名 ●船中泊●日本人添乗員が同行します ●食事:朝20回、昼19回、夕20回 ●医師、看護師が乗船します ●使用客船:パシフィック・ワールド号(総トン数77,441トン/運航会社シーホークコーポレーションリミテッドインク)

お申し込み・ご相談は

**0570-030-617**

11:00-17:00 定休:土日祝



学びと遊びがいっぱい!  
船の上でも、日本各地でも

夏のピースボートクルーズは

**18歳未満 全員無料!**



家族で過ごす、かけがえのない夏休み。子どもも大人も楽しめる、安心・充実のプログラムをご用意しています。



船の上で日本のお祭り  
洋上夏祭りを開催



家族でゆったりくつろげる  
ファミリー船室



子どもに大人気!  
プール&アイスクリームバー

適用条件 18歳未満無料プラン

- ・大人の人数で船室クラスをお選びいただき、料金表の『18歳未満無料人数』が無料となります。
- ・出発時、18歳未満の同行者が対象です。
- ・大人との同伴同室に限りです。
- ・別途諸費用(ポートチャージ・チップ・国際観光旅客税)が必要です。
- ・ベッドは上段ベッド、ソファベッド、折り畳みベッドとなる場合があります。
- ・小学生以下(未就学児を含む)のお子様、大人の人数を超える場合は、事前に弊社までご相談ください。
- ・出発時、1歳未満のお子様は乗船できません。



## 自分だけのマスカレードマスクを

事前のワークショップでオリジナルマスクづくりに挑戦。とおきの一日に向けて、個性あふれるマスクが次々と完成していく。



## Masquerade Party

## きらめきと笑顔が交差する マスカレードパーティー

世界一周クルーズで華やかに開催されるクルージングパーティーのなかでも「マスカレードパーティー」は、老若男女を問わず大人気のイベント。専属ミュージシャンの生演奏をバックに、参加者たちが仮面をまとうランウェイを歩くファッションショーや、フォトブースでの撮影、そしてダンスパーティーまで。船内が幻想的な舞踏会場に変わります。



マスカレードはイタリア語で「覆う(マスケラ)」という言葉が語源。仮面を付けることで身分や階級なく交流を楽しんだと言われている。船内では年齢、国籍の境なく誰もが楽しめる、特別な時間となった。



世代を超えて、互いに笑顔で手を取り合いながら、夜は更けていきました。

世界一周クルーズの定番イベント、マスカレードパーティーが今回も船内を華やかに彩りました。参加者たちは心躍る装いで集結。年齢を問わず、誰もが主役になれる非日常の一日です。

パーティー前にはこの日に向けたワークショップが開かれ、オリジナルのマスクづくりに挑戦。スパンコール、羽根、リボンにビーズなど思い思いの素材を使い、マスクづくりに夢中になりました。出来上がった仮面を鏡の前で確かめる笑顔は、期待に満ちていました。

パーティー当日、専属ミュージシャンによる華麗な生演奏が流れ、華やかなドレスや個性的な衣装に身を包んだ参加者たちはランウェイに集います。仮面をつけ優雅に歩くファッションショーは、アトリウムが舞台。歓声と拍手が絶え間なく続き、熱気に包まれました。また、フォトブースでは、豪華な背景や装飾アイテムが用意され、グループでの写真や一人ショットも楽しめます。カメラを向け合いながら、笑い声がこだましました。

その後はダンスパーティーへ。軽やかな音色に合わせて参加者が自由に踊り出します。ダンス初心者も熟練者も交じり、船内はまるで古きヨーロッパの社交界のような雰囲気。国籍や



# 船上百景 [ヨガ]



夕陽を浴びながら、ゆっくりと呼吸を整える至福のひとつとき。

## 船の上で見つける

### 自分だけの静寂ヨガ

クルーズ中に開講されるカルチャースクールのひとつ、朝のヨガ。これは定番ですが、それ以外にも船上ではさまざまなスタイルでヨガが楽しめます。たとえばプールデッキで太陽を浴びながら行うヨガは、開放感を体いっぱい味わえるひとときです。夕暮れには、屋外デッキに集い、海風と水面の穏やかな音に包まれながらポーズをとる「サンセットヨガ」が行われることも。参加者からは「海を見ながらのヨガは心の底からリラックスできる」「いつもより深く呼吸できる」といった声も。また船内スタジオでは、波の音をBGMに、集中してポーズに向き合う環境も提供しています。気が向いたときに参加もOK。ヨガは体を整えるだけでなく、航海中の「自分時間」を取り戻すリセット効果に最適で、旅の充実度がさらに高まります。



海風を感じる開放感ヨガ。



初心者の人も気軽に参加。



「芸術は決して完成されることはない。ただ、見捨てられるだけだ」——レオナルド・ダ・ヴィンチ。地球も、そして平和も、同じかもしれません。地球一周の船旅では、寄港地ごとに異なる風と空気が、そして地球の今に触れることができます。赤道に近い南の島々は陽射しが強くても、海風は涼しく穏やかに過ごせます。それでも、船旅を通して地球の変化は確かに感じられます。ドバイに住む友人は「今年の海は熱すぎて、泳ぐどころか海水温はお湯のよう」と嘆いていました。

地球の風景は、美術館に飾られた名画のように美しい——けれど、ある日気づくと、その絵がゆっくりと燃えている。誰かが火をつけたわけではなく、私たちの無意識が少しずつ炎を招いているのかもしれない。

そしてこの夏、戦後80年という節目を迎えました。昭和、平成、令和と時代は移つても、人の命の重さは変わりません。しかし、世界では今も80年前と同じく命が脅かされています。ピースボートの船旅では、戦争の記憶を語り継ぐ人々や、紛争後の復興に取り組む現地の方たちとの出会いが生まれます。彼らが静かに、けれど力強く語ってくれる言葉は、教科書よりも深く胸に刻まれることでしょう。

地球も、平和も、名画のように美しい。けれどその背景には、誰かが積み重ねてきた祈りと努力があることを、旅はそっと気づかせてくれるはずです。(長谷川・編集部)